



白石加代子さま

たまには手紙で

2通目



長塚圭史より

白石加代子さま。

先日は茹だるような暑さの中、人で噂返る渋谷のPARCO劇場までいらして下さり、ありがとうございました。血や性に向き合った重い内容でもあり、どういう感想を抱かれるか大いに不安でしたが、終演後、楽屋にいらして下さった時お顔を拝見し、まったく杞憂であったと知りました。小劇場運動の魁・鈴木忠志氏と共に60年代後半〜70年代アンダーグラウンドを彩り、ライフワークにされている怪談話「百物語」、異形の愛を描いた「身毒丸」、血に纏わるあらゆる悲劇を著したシェイクスピア作品などに数々出演してこられた白石さんに、いやそもそも昨年年末「ビューティ・クイン・オブ・リナーン」というあまりにも痛々しい悪意と弱さに満ちた惨劇を共に創った仲間である白石さんに、ちょっとやそっと暗く重たい物語をご披露するからといって余計な心配はいらない、と書いておきますね。

もっと深くもっと深くと

白石さんからのおたより 昨年暮れにご一緒したお芝居のことはいつ思い出してもフッと笑いが込み上げてきちゃうの。出演者4人、見えないうちでこっそり手をつないでおりましたね。時間が空きしだい、また連絡し合おうねと言って別れたまま、約束が果たされてません。

それにしても「ビューティ・クイン・オブ・リナーン」(長いので以下「BQ」とします。パーベキューみたいですが喉を鳴らしませんように)は楽しかった。実を言うとね白石さん、あの稽古を始める頃、少し調子が悪かったんです。体調ではなくて、精神が。自分が何処を向いているのか、無重力遊泳よろしくふわふわ、そしてそんな自分に苛々していたんです。ところが「BQ」の稽古に入った途端そんな脆さは吹っ飛んでしまった。それは勿論マーティン・マクドナーという作家の第一作である「BQ」の戯曲としての魅力が底知れぬものであったこと(それこそ嫉妬してしまうほど)、そして何よりどこまでも真摯に作品に向かう出演者、スタッフに恵まれたからです。直前の降板劇というトラブルに見舞われながらもタフにやり通せたのは、あそこには誰しもが作品を愛し、創作の現場を愛していたからではないかと思うのです。個々

の役割を最大限果たしながら、もっと深くもっと深くと全員が貪欲になつていった。あの力強い純粹さ。僕もまた、思い出すたび口元が綻んでしまふのです。

僕はちよこちよこ休憩を取るものの、すぐまた再開するじゃないですか。そうすると白石さん「あ、そうですか、もうやりますか」と言っていて可愛らしいおにぎりをちよこんと置いて渋谷立ち上がるのがおかしくてね。白石さんだって本当に嫌なわけじゃない。でも僕がしつこいっていろいろと休憩が短いっていうのは確か。「あれ? もうちよこっと休みますか?」と僕が聞くと、「いいのよ、どうして? あたし、やりたいの。やらせてください」。みんな大笑いした。ああいうユーモアが現場を強靱なものにしていったと思うんです。楽な芝居ではなかったもの。精神的にも肉体的にも凄くハードだった。でも稽古が始まる直前まで僕らはいつも冗談を言い合った。そして「さあ、やろうぜ」とどっぶりあの世界に浸かっていった……。

「BQ」の話はかりになつてしまいました。近況を書くかと思つていたのに、次は最近の僕のこと、書きます。僕ね、白石さん、早稲田小劇場の頃のお話も少し伺いたいと思つていたので。白石加代子がどう形成されてきたのか。そんな質問していいのかしら。

お返事お待ちしております。

(ながつか・けいし 劇作家)
(しげいし・かよし 俳優)